

ことなし、と書くという事

——一葉日記における記述意識——

棚 田 輝 嘉

1 はじめに

一葉日記が様々な側面を持っていることはよく知られている。「文学修業日記」歌日記「物語日記」という「第一次的な層」と「記録日記」という「第二次的な層」の二つの層を持つという関良¹⁾の指摘がある。私もかつて「正系日記の誕生——影印版『若葉かけ』を読む²⁾」において、「一葉にとって日記は、日々の出来事を記録する装置に止まるものではなかった。その時々³⁾の心の動きから生まれてくる随想や歌、つまり広義の文学も彼女の日記には不可欠の要素だったのである。」と述べた。しかし同時に、日々の記録を主たる目的とした「一葉日記の正系を成している」³⁾日記群の重要性についても指摘してきた。本稿では「正系日

記」が一葉の中でどのように成立していったのか、彼女にとってどのような意味を持ち続けたのかという事について、影印版一葉日記³⁾を参照しながら検討してみたい。

2 正系日記群の成立

日々の記録を記すことを主目的とする「正系日記」は、筑摩書房版『樋口一葉全集 第三卷(上)』(以下『全集』と記す)に「身のふる衣 まきのいち」(明治20年1月15日—8月25日)から、「ミつの上日記」(29年7月15日—7月22日)まで、四十八種が所収されている。その中には「(日記断片)」とされる断片も含まれているのだが、これらに共通するのは、日々の記録を残そうという意識である。つ

まり日記本来の目的である、記録を可能な限り毎日記し続けるという意識によつて成り立っているということである。しかし、始めからこうした意識が内包されていたわけではない。

現存する最初の日記「身のふる衣 まきのいち」は萩の舎へ通い始めた頃の出来事を、記憶をたどつて纏めた（物語）ともいふべきものになっている。明治20年1月15日の日付を持つ記事から始まり、22日、29日と、日記形式で週一回の萩の舎の稽古日の出来事を記していく。しかし、例えば「人々の御点いか成しかおほえす」（2月5日）、「此日いか、なりしかおほえす」（2月26日）といった記事を見れば、「日記」が記憶を元に、後に纏め書きされたものであることが分かる。また、記事全体を貫くのは自分の歌が選ばれたという晴れがましい出来事を書き残しておこうといった意識であり、記録という形式を借りた（我が成長の物語）が企図されている。

ついで「鳥之部」と仮題された日記が登場する。このうち「I」とされた日記は22年7月12日から9月4日まで。『全集』補注には「父則義の病没から書き起こして芝西応寺町の次兄虎之助方へ移転同居するまでが記されており、後日の備考に書き留めた覚書を整理し、浄写したようである。」とあり、また『樋口一葉辞典』⁵⁾では「家庭の中心に

ある者として記録を遺し保管する則義の仕事を意識的に継承した形跡が見られる」と述べられている。一日毎の出来事を記録し、残す、という日記本来の役割を与えられた最初の日記であり、一葉はこの「鳥之部」という（日記）を通して、日録としての日記の意味を学んでいったのだと想像される。引き続き「II」は「翌年一月十六日にはじまつて、断続的に三月十四日までが書かれている。Iを浄写したあとの残り数丁の余白を利用したものである。」（『全集』補注）という解説があるが、1月16日から17・18・19・20・21日と連続する六日間、その後3月2日と14日の二日分の記事が記されている。「I」の後を受け、日々の記録を残そうという意識は前半の六日間に色濃い。

しかし、これに続く「若葉かけ」（明治24年4月11日—6月24日）の成り立ちは、単純ではない。これについては前掲拙論（「正系日記の誕生」）で詳しく述べたが、その大筋を述べれば、冒頭4月11日の花見の会の記録は、おそらく手元にあった下書きを元に再構成され清書されたものである。従つて、「身のふる衣 まきのいち」の執筆意図とそう隔たったものではない。一方、4月15日の「半井うしに初てまミえ参らする日」以降の記事は、翌日、またはそれに近い日に書かれ、出来事を記録するという、本格的な日録としての体裁を備え始めている。ただ、そうは言つて

も、桃水という師について小説を学ぶ我れの物語、という創作的要素はまだ内包されており、完全な日記とはなっていない。天気記述などを参考に検討すれば、おそらく「正系日記」と呼びうる形式と内容とを持ち始めたのは、5月末から6月上旬頃の記事以降の事であろう、というのが、趣旨である。この「正系日記」の成立について、改めて、以下具体的に検討しておくことにする。

3 毎日記録を付けるという事

「若葉かけ」の、例えば5月30日以降の記事（【図1】）を見ると、

卅日 残りの原稿郵便して送る 此日は礫河の稽古也

卅一日 ミの子ぬしの発会三番町の万源にて催しあれ

はおのれは早くより趣く（以下略）

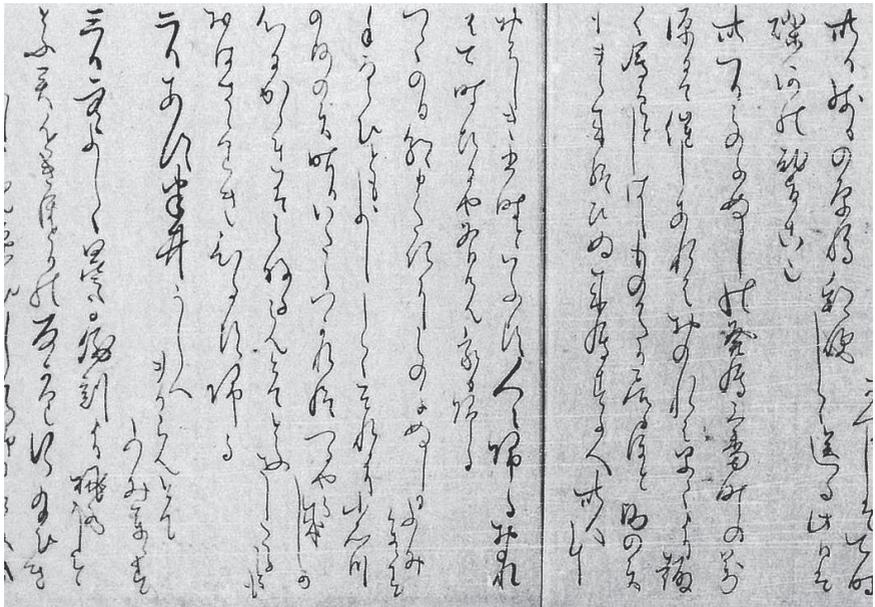
つくの日朝またきにミの子ぬしにふみ参らす（以下略）

二日 あす半井うしへまからんとてふみ参らす

三日 空少し曇る 例刻より桃水うしをとふ（以下略）

という書かれ方がされている。

「つくの日」とあるように、少なくとも31日と6月1日は纏め書きされたものである。影印を併せ見ると、少なくとも30日から2日頃までは、纏め書きされた可能性が高い



【図1】（5月30日～6月3日冒頭）

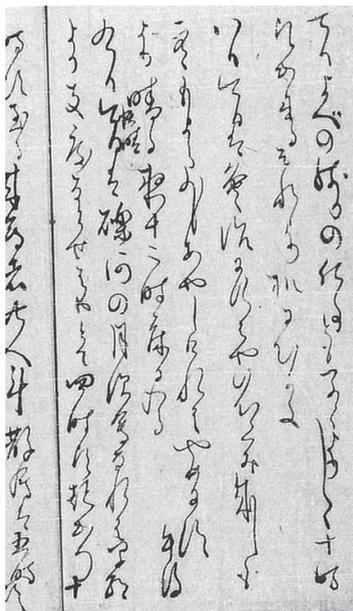
ように感じられる。

6月7日以降の記事（**【図2】**）では、

七日 よべの残りの仕事とも早くよりして十時頃出来る
それより机にむかふ

八日 今日は灸治に行はやの心くみ成りしも（以下略）

九日 今日は礪河の月次会なれば早朝より（以下略）



【図2】（7日～9日冒頭部分）

とあり、6月13日から16日まで（**【図3】**）でも、

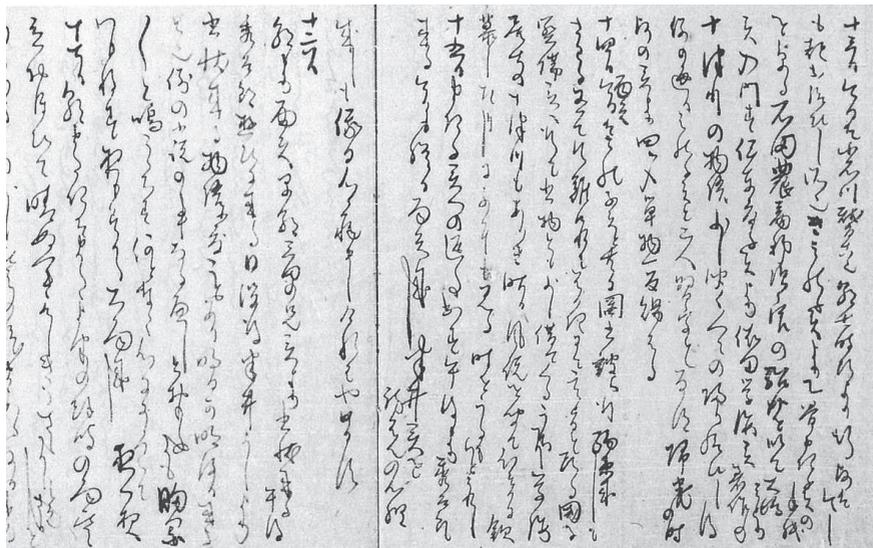
十三日 今日は小石川稽古也（以下略）

十四日 今日はミの子君と共に図書館へ行約束成しも

（以下略）

十五日 まき子君への返事出す 午後より秀太郎来る

今日も終日雨天成し（以下略）



【図3】（6月13日～16日）

十六日 朝より雨天（以下略）

と書かれている。

【図3】を検討すると、14日15日16日の日付がほぼ等間隔になっている。また、16日は日付の後に改行して記事が書かれている。おそらく16日の記事を書こうとして、一葉は13日の記事の後に、14日15日16日と日付のみを等間隔で書き入れたのである。そして16日の記事を書き、14・15日の分はその後暇な折に書き足したのではなからうか。

こうした作業は、一葉が、可能な限り毎日の記事を書き記そうとしていたことを物語っている。つまり日記が日録として意識されていたということである。ただ、後述する「5」「ことなし」と書くことにより毎日の記録を残すという意識と、ここでの意識には相違がある。「若葉かけ」の場合、「今日は」という記述があるように、独立しているはずの一日が前後の日々との関連において位置付けられている。「今日は」とは、〈昨日と違いこの日は〉あるいは〈翌日はこうだが、前日のこの日は〉といった意味を持っているので、その日が前後と切り離された別の日であるという意識は弱い。日記が一つの物語を成すという、平安朝の女流日記風な全体意識／創作意識のようなものが底流にはある。そういう意味で、この時点において、まだ日記は毎日の出来事を記すための装置として、ようやく意味を持

ち始めた段階だと言える。

ところで、一葉の日記は、先に述べた「身のふる衣まきのいち」が書かれる明治二十年から、没年の二十九年まで十年にわたって書かれているのであるが、書かれている日数は年によって異なる。前掲拙論において、

一葉日記は全体として、初期（明治二十三年頃まで）の物語性の強い、平安朝の女流日記を意識した書きぶりをしている時期、中期（明治二十六年頃まで）の日々の記録を書き付けることを第一義としている時期、そして後期（没年の明治二十九年まで）の、出来事よりは自分の気持ちを書き記そうとしている時期、の三期に分けることが出来るのである。

と述べた。日記が記された明治二十年から二十九年までの十年間の記事が記された年ごとの日数は、前期四年間は、明治20年12日、21年0日、22年27日、23年8日と少ない。24年に入ると120日と急に増え、25年260日、26年291日、この三年間が中期に当り、一葉日記が日録であり続けた期間である。後期の27年は78日、28年72日、29年32日、となる。

「若葉かけ」について、『全集』補注では「明治二十三年までに書かれた、様式の未分化な先行資料のあとを承けて、正系の日記と傍系資料との分立が確立しようとする岐路に位置するのが『若葉かけ』と『筆すさび』である。」と

述べられている。『筆すさひ一』は全集では『第三卷(下)』(昭53・11)に収録されているように、正系日記とは異なる日記として位置付けられたものであるが、確かに「若葉かけ」以降を正系日記の時代と呼ぶことが出来るのである。

しかし、そうではあっても、先に述べたように、この時点で一葉日記の形式が確立されていたわけではない。日記帖という既成の手帖であれば、日付・天気欄があり、その日の記事を記入するスペースがある。一日分が一ページに限定されていたりもする。しかし、自ら和紙を綴じた冊子を使用している一葉の場合、自分自身で、何をどのように書くのか決めなければならなかった。日付、そして天気を書くの制限が書くといい(書式)のほか、何を記事の定番として書き残しておくのかという事について、一葉日記には流動的な側面がかなりある。そこに、日記を書くことに対する一葉の意識の変化、一葉日記の(成長)の過程を読み取ることが出来る。これについて、引き続き、日記を辿ってみることにしたい。

4 なぜ書くのか、という事

「若葉かけ」冒頭には「おもふこといはさらむは腹ふくるゝてふたとへも侍れはおのか心にうれしともかなしとも

おもひあまりたるをもらすになん」とあり、4月15日の記事に「姿形など取立てしるし置んもいと無礼なれと我が思ふ所のまゝをかくになん」ともあるように、もともと一葉にとつて日記は、感想録として意味を持っていたようである。さらに5月2日には「中のけしき人々のさまは詞たるましくよ日記しぬへし」と、萩の舎に集った人々の記録を書ききれないから残り(余)は改めて書くこととした記事もある。ここでは、その日その日の記録を簡潔に残すと共に、書ききれない事柄については、改めて——そうしてそこには物語としてという意識も含まれていたと思うが——書くという、日記の位置づけを自らの中で確定していることとする過程が見て取れる。「若葉かけ」に続く「わか艸」(明治24年7月17日—8月10日)の中に「しのはすの記は別にしるす」(8月5日)という記事がある。次の「蓬生日記」(明治24年9月15日—11月10日)冒頭では「日かけにとほきやへむくらのあきいと、露のおき所なさに筆さしぬらしてかひつゝ、くれはあやしう人のしりうことのやうにもなり侍りしかな」と記している。記録の域を超える事項は後に別に書くと言い、一方で、記事は単なる陰口を記したものにすぎないのではないのか、という、日記を書くことの意味を模索する姿を読み取ることができる。

書くという意識は、その後、

かまへて人にミスへきものならねと立かへり我むかしを思ふにあやふくも又ものくるほしきこといと多なる
〔「につ記」(25年4月18日—5月29日) 冒頭〕
と記され、

めになれ耳に聞えけるものしたかひておもひに成ぬるいとさわなれとこれをしも今しるさむとすればわつらはしさの堪え難きをいか、ハせむ いさ、らは昨日の我に耻つる身なからこりすまに今日是とみる所をしるさまし

〔塵中日記 今是集(乙種)〕(26年10月9日—11月14日) 冒頭)

さらに、

今の我ミのかゝる名得つるか如くやかて秣かせた、んほとハたちまち野末にミかへるものなかるへき運命あやしようも心ほそうもある事かな

しはし書と、めて

のちの寢覺の

こゝろやりにせはや

〔「水のうへ日記」(28年10月7日—11月7日) 冒頭〕

と、その時々々の生活状況によつて多少の変化はしているものの、自己の生活と心の記録を記し、後に読み返す便とすべきものとして意識されていることに大きな違いはない。

それは一葉にとつて日記が読み返しを前提とする記録装置として、機能していたことを物語っている。

とするならば、そこに何を記録するのか。それが重要な問題でもあったはずである。

「若葉かけ」には、しばしば帰宅の記事が時刻等を伴つて記されている。

ミ心そへの車して帰る 夜八時(5月8日)

此日はものかたり少しして帰る 日没まへ成し(5月15日)

かへりしは七時(5月27日)

ひる頃帰る(6月1日)

二時頃よりミの子ぬしと共にと書館に行 六時帰宅す

(6月10日)

など、日記に記すべき一日の生活の終わりを帰宅時とすると決めているかのような書きぶりである。6月1日の記事も「ひる頃帰る」で終っている。

一葉は、日録としての日記を書き残そうとして、形式をどうするか模索していたのであろう。日記が自分の生活の記録として意識され始めた時、そこに欠かせない要素として何を入れるべきか。そう考えた時に、一日の始まりから終わりまで、外出した際には、帰宅の記事によつて終わりとするという方法を採用することにしたのではなからう

か。しかし、この習慣は「若葉かけ」に特に目立つ傾向であり、次の「わか艸」(24年7月17日―8月10日)以降では、帰宅時刻の記述が減ると同時に、母や邦子が自分の帰宅を待つという記述が散見されるようになる。

家に帰れば母君は外に出て待給へり 妹は夕けのもう
けいそかわしくし居たり(「わか艸」24年8月8日)
家に帰りしは日のやうくくらく成る程成りしかは母
君途中までむかひさせ給ひき(「蓬生日記一」24年
9月25日)

母様むかひに出給ひて途にて行違ひぬ(「蓬生日記一」
24年10月9日)
さらに、就寝時刻を記すという形式が「蓬生日記一」以
降の定番の一つになってくる。

今宵もまた早うふしぬ いとかいなしや(9月27日)
十一時半頃ふしぬ(9月28日)
此夜はさまたねふたからねは十二時頃ふしぬ(9月29
日)

ふしとに入しは十二時成りき(9月30日)
此夜は早う打ふしぬ(10月1日)
此夜は更にねふからす 十二時ふしぬ(10月2日)
と、義務のように連続して書かれている場合もある。

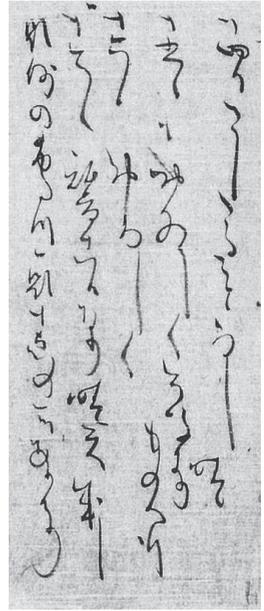
帰宅時刻や帰宅に関する出来事、さらに就寝時刻を記す

という方法はこの頃の一葉の(生活圏)を反映した結果だ
と言える。つまり一日の終りを自分の就寝の時点にする
という、日記通常の発想に加え、内Ⅱ家と外Ⅱ他者とを峻別
し、内Ⅱ家Ⅱ私の生活の内部に戻ることを以てその日の
生活の終わりとする、という生活感覚である。しかし、こ
うした(内向き)の個人的な記録に止まるのではなく、広
く世間全体を見渡して、その時々のが我が生活の記録としよ
うという傾向が次第に強まってくる。これに呼応するよう
に、日記は、可能な限り毎日付けられるようになっていく。
こうした意識を物語るものの一つが「ことなし」という記
事の存在である。

5 ことなしと書くという事

「蓬生日記一」の10月14日以降の記事(「[図4](#)」)は次の
ようになっている。

十四日 さしたることなし 晴
十五日もおおなく 午後よりものへ行
十六日 おおなく
十七日 稽古日なり 晴天成し 題例のふたつ 一題
十点の一ツありけり



【図4】(14日～17日冒頭)

「十五日も」という記述もそうだが、影印も参照すると、14日～16日の三分は纏め書きされたことが分かる。以下、どのような順で書かれたのか推測してみる。

17日は萩の舎の稽古日で、かつ五十六行に渡る長文である。「旧菊月十五日」の月見の記事が大半を占める。一葉はこの優雅な体験を忘れないうちに記しておこうと思っただけであろう。別稿で一葉は朝に日記を書いたと述べたが、17日の記事のほとんどは、翌18日朝に書かれたものと思われる。しかし、「十七日 稽古日なり」までは、17日早朝、萩の舎に出かける準備で慌ただしい中で書かれたものである。こうした推測をするのは、「十七日 稽古日なり」のあとに「晴天成し」と天気が記されていることによる。詳細は拙論(「雨の物語・その他」)をお読みいただきたいが、萩の舎稽古日の記事は、「日付・天気・稽古」の順で書か

れていれば、記事は稽古日の翌朝以降に纏めて書かれたものと推定でき、一方「日付・稽古・天気」と、天気が後に書かれている場合、「日付・稽古」の部分のみが稽古当日の早朝慌ただしく書き記され、天気以下の記事は翌朝以降に書かれたものとみなすことが出来るのである。

元に戻れば、17日早朝、「十七日 稽古日なり」と書き付けようとした時点で、日記帖には13日までの記事しか書かれていなかったのではなからうか。つまり一葉は、萩の舎の稽古の準備で慌ただしい時間の中で、13日～17日冒頭までを一気に書いたのである。「さしたることなし」という表現が登場するのはこの記事が最初である。後には、「ことなし」「無事」という表現が用いられることが多くなるが、いずれも(この日は何もなかった)という意味にかわりはない。これ以前の日記でも、例えば「(鳥之部)」の23年1月19日に「一日正朔の守の外かくべき事なし」という記事がないわけではない。しかし、「外かくべき事なし」とは、書くべきことは書いてあるという意味であり、「さしたることなし」とは意味が異なる。日記は日々の記録である。と同時に、書くべき事・書きたい事のみを選択して書くものでもある。従って、「さしたることなし」とわざわざ書く必要もない。それにもかかわらず、あえて(何もなかった)という意味のことを書いたのはなぜか。「蓬生日記」

は9月16日から11月10日までの三か月間の日記であるが、10月11日を除くすべての日の記事がある。毎日日記を書く、それが「蓬生日記一」を貫く精神であった。そのために毎日の日付が日記には必要なのである。従って、書けなかった日の分は後に纏め書きをすることになる。しかし、その日の出来事を思い出せない時もあったはずである。それにもかかわらず日記を埋めるためには「さしたることなし」という記事もまた、必要だった。言い換えれば「蓬生日記一」によって初めて、必ず毎日の記録を残すという、真の意味での「正系日記」が登場したと言えるのである。

ところで、欠けている10月11日の前日の10日の記事には「此夜中より国子俄に腹痛をやむ 夜一夜只くるしみにくるしミてはかなう明ぬ」とある。12日には「国子なほおこたらず」とあるから、11日～13日にかけては邦子の看病で手一杯だったのであろう。それでも、14日以降と同じように、11日の記事を「ことなし・さしたることなし」と12日の記事を書く時に一緒に書くことはできたはずである。なぜそれがされなかったのか。おそらく邦子の病という重大事がある以上、11日の記事を（さしたることなし）と書くわけにはいかなかったのであろう。しかし書けば邦子の病状について長文の日記になってしまう。それを煩わしく思っ、この日の日記を書くことを断念したのではなから

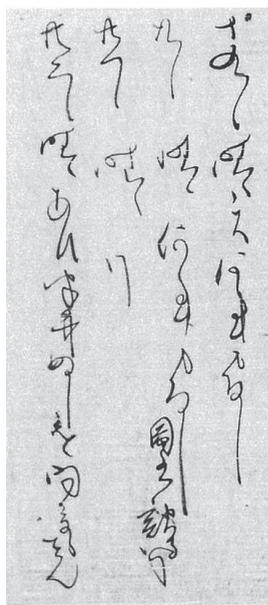
うか。また、「蓬生日記一」は、内容が一行程度で終る短い記事は、先の（ことなし）系の記事以外にはない。つまりその日の出来事を可能な限り詳しく書き記すというのが、この日記の論理だった。11日もそうした論理に支配されていたからこそ、逆に書かれなかったものではなからうか。しかし、14日から三日続けて書けなかったとき、新たな局面に突き当たった。そのために生み出された方法が纏め書き、あるいは余白を空けて後に書き込むという方法であり、同時に、「さしたることなし」（何もなかった）と書くことも記事の一つとするという手法なのである。

実際「蓬生日記一」では、10月の記事（**図5**）でも

十九日 晴天 何事もなし

廿日 晴 何事もなし 図書館に行

廿一日 晴 同

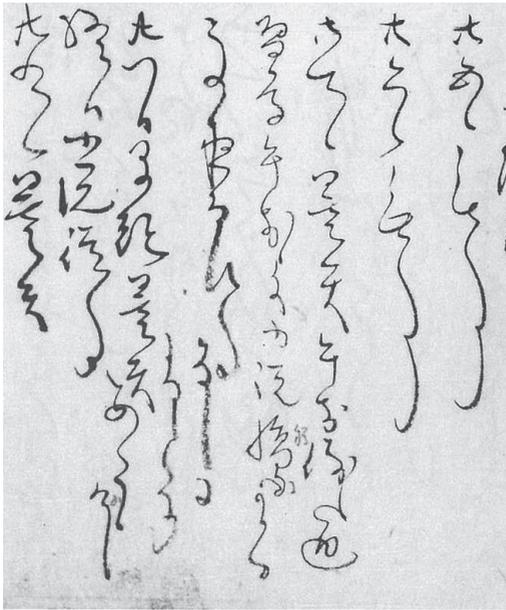


【図5】（19日～22日冒頭）

廿二日 晴 あす半井ぬしを問参せん（以下略）
という記述が出てくる。おそらく纏め書きである。

以後、一葉の日記は、「無事」という何事も無いという趣旨の記事や、天気しか記されない日が目に付くようになる。例えば「につ記一」（25年1月1日―2月9日）には次のような記事（【図6】）がある。

（二月）廿五日 無事
廿六日 無事

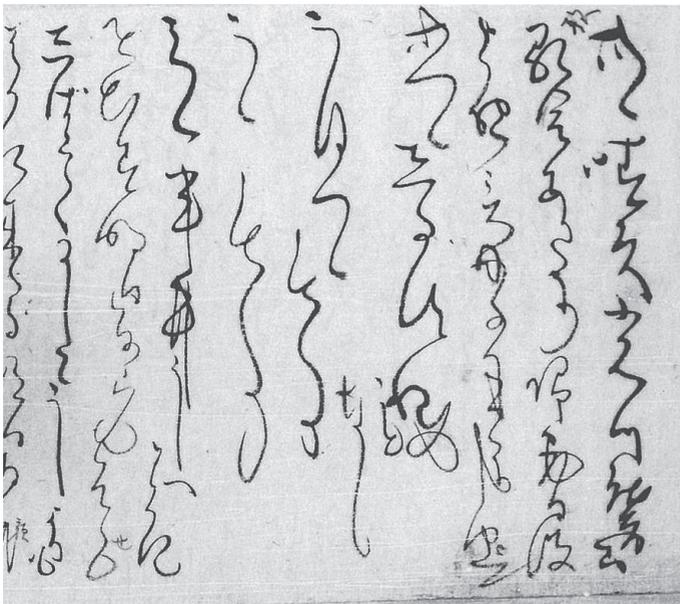


【図6】（16オ）（1月25日～29日）

廿七日 曇天 午前例之通習字 午前より小説稿にかゝる この夜なす事なしにふしたり

廿八日 早起 曇天あた、けし 終日小説従事

廿九日 曇天（以上「十六オ」）



【図6】（16ウ）（1月30日～2月3日）

卅日 晴天 小石川稽古 歌合ありたり 帰宅日没

上野君母子来たりし由也

卅一日 しるす程のことなし

二月一日 無事

二日 無事

三日 半井うしへはかきを出す 明日参らんとて也

(以下略)

因みに、この翌日の2月4日が〈雪の日〉と呼ばれる記事である。

この「につ記一」について『全集』補注には

日記は、「無事」「ことなし」と書かれている日が多い。無為な時間の経過の中で、桃水を意識してその居宅を訪問する描写だけが、雪の日を中心にいきいきと精細に書かれていて、葛藤のうちに抑えがたい感動の起伏が続き、はかどらない小説の習作が気まぐれに記録されている。

と解説されている。確かに「無事」「ことなし」の多さに着目すればそのようにも見えるのだが、これらはいずれも後の纏め書きなのである。〈雪の日〉を巡る記事については別稿で論じたが、おそらく纏め書きの範囲は、1月末からこの日記帖の終わる2月9日にまで及ぶと考えられる。

つまり、〈雪の日〉を巡る日記記事は、2月4日の〈雪

の日〉に焦点を合わせ、その日だけを劇的に描き、一方で、日記形式を維持するため日が欠けないように、残りの日々を後に纏め書きしたものと考えられるのである。天気——しかも「曇天」という記憶に残りにくい天気——が記されている日については、それほど間をおかずに書かれたであろうという事も考慮して詳しく見ていけば、25日・27日が纏め書き、さらに、31日以降が、纏め書きされたものと推定できる。

また「につ記」(25年9月4日—10月25日)の9月11日以降(〔図7〕)には、

十一日 晴天

十二日

十三日

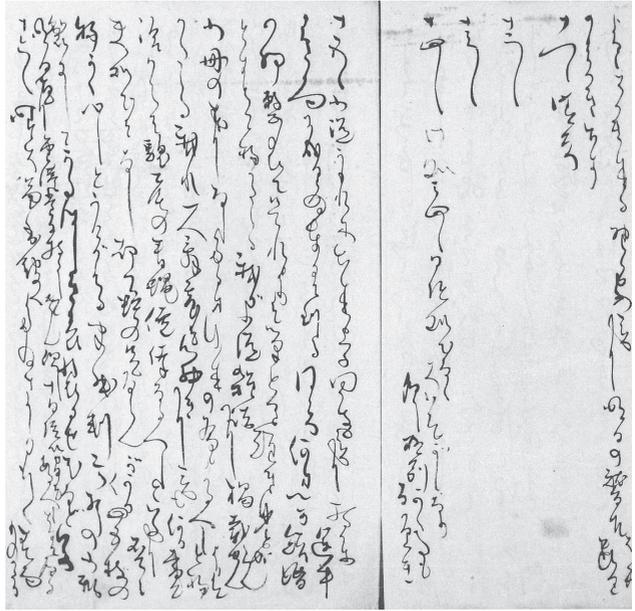
十四日 此処三四日日記処でなく大いそがしなり 但

し格別かく事もなかりき(以上「二ウ」)

十五日 小説うもれ木出来る 田辺君に持参(以下略)

とある。

『全集』脚注の11日の項には「日曜日。以下『うもれ木』の製作のため日付のみの記録が続いている。各日付ごとに二行分の余白が残してある。」とある。14日の記事にもあるように、確かに多忙であったのであろう。しかし問題は、「二行分の余白」を残したことである。日記は15日の記事



【図7】(11日～15日)

を先に書く必要があつて、そのために設けられた余白だと考えられる。影印の筆遣いを見ると、記事が慌ただしく書かれていることが分かる。小説執筆に忙しい中で、日記もまたわずかな余暇を使って急いで書かれたのであろう。ところで15日の長文の記事は、「うもれ木」が完成したので

田辺花園の家に届け、次の執筆の相談もしたという記事であり、その中にさりげなく、花園の婚約が調つたという記事が挿入されている。この時期の一葉は、仲を疑われて桃水と絶縁し、小説発表の舞台を失っていた。そのため、萩の舎の仲間である花園の口利きで「うもれ木」を掲載する機会をもらつたという出来事に対応している。先の日記記事の何が本当は書きたかつたのかよく分からないが、とにかく15日の記事を優先して、それ以前の日の記事は後に書くつもりで、日付だけを記したのである。

同じような例をもう一例だけ挙げておく。「につ記」(26年5月12日―6月10日)の5月16日からの記事(【図8】)である。

十六日 雨

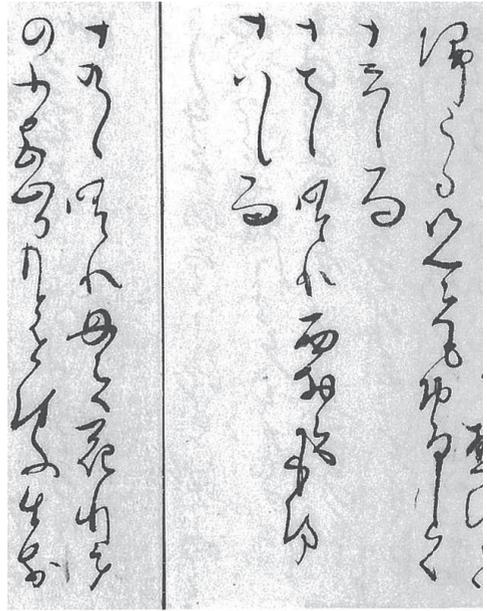
十七日 晴れ 西村君来訪

十八日 雨(以上「一ウ」)

十九日 晴れ 母君花川戸の小宮山かもとを訪ふ(以下略)

19日の記事は22行、ただしこの記事の後に「恋は尊とくあさましく無ざんなるもの也」に始まる有名な恋愛論が37行に渡って書き記されている。これは19日の記事と同時に、翌20日の記事を書く前に書かれたものと推定できる。

影印をみると、19日の記事は日記帖の二丁目表(二才)



【図8】(15日末尾～19日冒頭)

から始まっており、18日は一丁目裏(一ウ)の最期、しかも余白がある。19日以降の記事を書くために、15日の記事の後を余白として残し、ページを改めて19日の記事を書いたのであろう。この改ページを余白の目安とする方法は、先の「につ記」(図7)にも見られる。

繰り返せば、日記は書く必要があると判断された事柄のみが記される装置である。しかし同時に、毎日の記録を記す装置でもある。こうした判断を前提に一葉は、「ことなし」「無事」さらに天気のみ、空白、といった方法で、毎日へ欠

かさず)記事を書き付けたのである。言い換えれば、毎日書き続けるために「ことなし」という文言が必要とされたという事でもある。したがって「ことなし」「無事」という記述は、その日に何もなかったことを必ずしも意味しているわけではない。多忙な日々が続いた時に、書き得なかった事柄を後に書き記そうとして、余白の大きさや記憶の薄れなどによって、結果的に「ことなし」と記されている可能性もあるのである。それらを十分意識して、一葉日記を読み取る必要がある。

なお、「ことなし」といった表現が用いられるのは、明治25年～26年に集中している。それ以外では、明治27年に二例、28年に五例、それらしい記述がみられる程度である。ここでも、日件録としての「正系日記」が中期を特徴づけるものであると言えるのである。

6 おわりに

樋口一葉の文学にとって日記は欠かすことが出来ない重要な要素である。それは《日記文学》として意味を持つだけでなく、日記を付けるという作業自体が、一葉という表現者を育てたからでもある。日々の生活の記録を残すためには、生活者として自らを含む周りの世界を客観的に見つ

めなければならぬ。同時に、そこに関わる己れの位置を測定するために、自己を見つめる必要もある。さらに、何を書き、何を書かないのかという取捨の判断は、そのまま創作の修行にもなったはずである。しかし、こうした事柄以上に重要なのは、日記という一見記述方法が確立されているように見える記録媒体が、思ったほど画一的な方法論に支配されてはいないということではなからうか。和紙を綴じて冊子を作り、日記を書こうとしたとき、一葉は、まづその形式に戸惑い、次いで、書くべき内容に悩み、さらに、欠かさず記録するという日記の役割に苦しんだのではなからうか。先に述べたように、晩年の一葉日記は、書かれる日数が激減している。それに伴って記事内容も、その折々の心の動き、感想録の要素が色濃くなってくる。しかし、一旦、日々の記録を書き記すという目的を持たされた日記は、その性質を完全に失ってしまったわけではなかった。

この頃の事すへて書尽しかたし 朝鮮東学党の騒動
我国よりの出兵 清国との争端 これらハ女子の得よ
くしるへき事にもあらず かつは此頃打ちつ、き心の
せわしきにその日の事をその日にした、めあへねはや
かてハ忘れて散うせぬるも多かり 又折をまちてかひ
つけてん

これは「水の上日記」(27年6月4日―7月23日)の6月20日と6月28日の記事の間に書かれている。前半に書かれているのは新聞に載っていた記事を並べたもので、その日の事をその日にした、め得なかつたことの代用とすることで、かろうじて日々の記録という体裁を整えようとしているのである。晩年の一葉は、新聞記事からの抜き書きや、それへの感想をしばしば日記に記している。この時期の一葉は、女性の地位や教育、さらに社会情勢全般に対する強い興味を持つていたと言われるが、己れの狭い周辺の記録に止まらず、社会に目を向けた時、日記は必然的に新聞の記事を取り込み始めたと言える。同時に、新聞はまさに日々の出来事の集積でもある。それらを日記に記すことは、彼女を取り巻く世界の出来事を日々書き残すことと同義でもあり得たはずである。そういう意味で、中期以降の「正系日記」の本筋は、最後まで維持され続けたとも言えるのである。

注

(1) 「一葉日記の秘密——その二重構造について——」(『國文學』昭39・10 學燈社)

(2) 『國文學』平16年8月号 學燈社

(3) 「凡例」(『樋口一葉全集 第三卷(上)』昭51年12月)

筑摩書房) 以下本稿における一葉日記の記事は、本書による。なお、旧字体は新字体に改めた。

(4) 鈴木淳・樋口智子編『樋口一葉日記 上・下』(平14年7月 岩波書店)

(5) 野口碩「日記」(平8年11月 おうふう)

(6) 「雨の物語・その他——一葉日記における天気記述を巡って——」(『實踐國文學』第62号 平14年10月)

(7) 墨色、書かれている位置を勘案すると、15日の「午後よりのへ行」という部分だけは、17日の本文記事を書く18日以降に書き込まれたものであるようにも見える。

(8) 「雪の日」——一葉日記における天気記述を巡って——(『国文学攷』第一七六・一七七合併号 平15年3月)

(たなだ てるよし・実践女子大学教授)